

(続紙 1)

京都大学	博士（農学）	氏名	YU ZHUZHU
論文題目	Spatial Conflicts and Public Perceptions of Sika Deer (<i>Cervus nippon</i>) in Urban Areas (都市域におけるニホンジカ (<i>Cervus nippon</i>) の空間的コンフリクトと住民意識)		
(論文内容の要旨)			
都市域の拡大，都市域への人口集中が進む中で，野生生物と人間との間のコンフリクトが顕在化している。近年，日本ではニホンジカ (<i>Cervus nippon</i>。以下，シカという。) の個体数が増加し，生息域が拡大する中で，自動車との衝突事故や農業被害など都市域におけるシカとのコンフリクトが問題になっている。このような背景のもと，本論文は，シカとのコンフリクトのリスクが高い地域を特定し，シカ及びその関連施策，鹿肉消費に関する都市住民の意識を明らかにすることによって，都市域におけるシカとのコンフリクトを緩和するために有用な知見を得ることを目的としている。 第1章では，研究の背景と課題として，まず都市域の拡大や都市域への人口集中にともなう野生生物とのコンフリクトの世界的な発生状況について文献レビューを行っている。そして，日本では特にシカとのコンフリクトが顕著に見られることについて述べている。さらに，シカとのコンフリクトの空間的リスク評価や，シカに関する住民意識の解明が，都市域におけるシカの適切な管理に欠かせないことについて論じている。 第2章では，まず本州，四国，九州において都市域で行動するシカが増加しており，シカとのコンフリクトが問題になっていることについて述べている。そして，シカとのコンフリクトが生じるリスクの高い地域を特定することが，都市域のシカの適切な管理に有用である可能性について論じている。政令指定都市を対象に，シカの生息密度，人口密度，農地面積からコンフリクトのリスクを算出し，空間的分析を行った結果，リスクがゼロに近い都市，リスクが特定の地域に集中している都市，リスクが広域に分布している都市のように，各都市のリスクの空間分布に特徴が見られることを明らかにしている。また，各都市におけるリスクの空間分布の形成にどの変数がどの程度寄与しているかを分析した結果，人口密度や農地面積の寄与率が大きい都市が見られる一方で，シカの生息密度の寄与率が大きい都市も見られることを明らかにしている。そして，これらの空間的特徴を把握することにより，より適切なシカの管理計画を策定することができると考察している。 第3章では，前章でシカとのコンフリクトのリスクが比較的高いと評価された京都市を対象に，市街地に居住する住民に質問紙調査を行い，都市域におけるシカとのコンフリクトの実態と，シカ及びその関連施策に対する住民の意識を明らかにしている。759名からの回答を分析した結果，74.8%の回答者が過去1年間に都市域で野生のシカを見たことがあること，72.6%の回答者が市街地に出てくるシカに対して否定的な態度を示していることを明らかにしている。ただし，都市域で見られる他の野生動物と比較すると，シカに肯定的な態度を示す住民の割合がやや高いことについても指摘している。その理由として，シカに対して「神聖」や「可愛い」というイメージを持つ傾向が日本の文化にあることを指摘している。シカ対策については，防鹿柵の設置や狩猟といった施策への支持が比較的高いことを明らかにしている。また，KH Coder 3.0.6によるテキスト分析の結果，回答者の生活への影響に関する自由記述で			

は交通事故が、シカに対する管理・対策方法に関する自由記述では鹿肉の活用・消費が特徴的なトピックであることについても明らかにしている。

第4章では、京都市市街地の住民の鹿肉消費に関する意識について分析している。542名の回答を分析した結果、都市域のシカ対策として狩猟を支持した回答者は、鹿肉の消費についても肯定的な態度を示すことを明らかにしている。また、鹿肉の消費に関する自由記述を潜在ディリクレ配分法によってテキスト分析した結果、多様な意見が6つのトピックに分類できることを示している。これらのトピックには、食料資源として鹿肉に期待する意見や、生態系保全のためにシカの個体数を調整するのであれば鹿肉を有効活用すべきであるという意見のように、鹿肉の消費に対して肯定的な意見が含まれる一方で、寄生虫や感染症といった鹿肉の安全性への懸念やシカの駆除に対する倫理的抵抗感から鹿肉の消費に否定的な意見も含まれていることを明らかにしている。さらに、これらの意見に対するセンチメント分析でも同様に、肯定的な感情を表す語から否定的な感情を表す語まで幅広く用いられていることを明らかにしている。

第5章は総合考察及び結論として、第4章までの一連の研究成果がシカとのコンフリクトを緩和し、シカを適切に管理するために活用できる可能性について論じている。都市域におけるリスクの大きさとリスクの空間的分布の特徴に応じた管理計画の策定や、シカや鹿肉消費に対する住民の複雑な感情、鹿肉の安全性に関する懸念を踏まえた適切な情報提供等が、シカとのコンフリクトを緩和するために有用であると述べている。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入する場合は、400～1,100 wordsで作成し
審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

都市化が進む中で、世界的に野生生物と人間との間のコンフリクトが増加している。日本では特にニホンジカ（以下、シカという。）の個体数と生息域が増え、都市域でのシカとのコンフリクトが問題になっている。このような背景のもと、本論文は、シカとのコンフリクトのリスクが高い地域を特定し、都市住民のシカ及びその関連施策、鹿肉消費に対する意識を明らかにすることによって、都市域におけるシカの適切な管理に資する知見を得ている。本論文の評価すべき点は以下の通りである。

1. 政令指定都市を対象にシカとのコンフリクトのリスクを算出し、そのリスクの空間的分布を分析することによって、対象都市の特徴を把握できることを明らかにした。また、この空間的リスク評価の手法が、シカの適切な管理計画の策定のために有用であることを示した。
2. 京都市市街地の住民を対象に、シカを目撃経験に加え、シカに対する態度から防鹿柵や狩猟といった対策への賛否まで多岐にわたる住民の意識を質問紙調査によって明らかにした。また、テキスト分析によって住民が抱える具体的な懸念や対策への期待を明らかにした。
3. 鹿肉消費に関する住民の意見を、潜在ディリクレ配分法やセンチメント分析によって詳細に分析することによって、食料資源や生態系保全の観点からの肯定的な意見が存在する一方で、安全性への懸念や倫理的抵抗感といった否定的な意見も存在することを明らかにした。

以上のように、本論文はシカとのコンフリクトに関する空間的リスク評価と、シカ及びその関連施策、鹿肉消費に関する住民意識調査を行うことによって、都市域におけるシカの適切な管理に資する有用な知見を提供したものであり、造園学、緑地計画学、景観生態学の発展に寄与するところが大きい。

よって、本論文は博士（農学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、令和7年7月24日、論文並びにそれに関連した分野にわたり試問した結果、博士（農学）の学位を授与される学力が十分あるものと認めた。

また、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

注) 論文内容の要旨、審査の結果の要旨及び学位論文は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。

ただし、特許申請、雑誌掲載等の関係により、要旨を学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降（学位授与日から3ヶ月以内）